季節を知ったら暮らしが楽しくなった

～第四六五号～

穀雨

四月二十日

長谷川かな女

木造始祭

二十四節気は百穀（いろいろな穀物）を潤し、芽を出させるという「穀雨」。二月半ばの「雨水」は雪が雨に変わる意味でしたが、穀雨は野山の芽を育む雨となります。そして、海にも恵みをもたらすのです。

伊勢の海の魚介豊かにして穀雨

神宮式年遷宮にちなむ遷宮諸祭「木造始祭」が四月二十一日、内宮と外宮で行われます。このお祭りは、御木曳初式で神域に運ばれたご用材（ヒノキ材）三本を鋸、手斧などの道具を用いて、原木から用材へと製材される様子を表現し、工事の安全を祈ります。手斧始とも呼ばれ、古来、重要な工事に先だって営まれていましたが、今では珍しくなっています。遷宮諸祭では、今も引き継がれていて、烏帽子に青い素袍姿の宮大工（神宮では小工）たちが、昔ながらの道具を手にして行います。

当日は、内宮は朝七時から、外宮が正午から行われます。前回取材したノートには天気は良いが風が強く冷たい、四月半ばというのに寒いと記されています。このお祭りには小工をはじめ、童男童女の物忌、神職たち五十人ほどが奉仕。長い列が参道を進みます。正宮をお参りした後、参道に戻り、五丈殿で神職のみ饗膳の儀が行われます。案に食がずらりと並び、一時間弱の儀式があります。そして、いよいよ五丈殿前で、手斧始の儀式が始まります。鋸で材を切る所作、墨壺をもって糸で線を引く墨打ち、先が「くの字」に曲がった手斧を振り下ろす所作を行います。

昔ながらの宮大工の技を、神さまの前で再現するという儀式。じっくりと古の技を拝見したいものです。

文　千種清美

伊勢内宮前 おかげ横丁

おかげの里便り

おかげ横丁

おかげ横丁 端午の節句

奈良時代以前より続く古い行事「端午の節句」。菖蒲や蓬で邪気を祓い、江戸時代以降は鎧や兜、鯉のぼりを飾って子どもの健やかな成長や立身出世を願う行事として親しまれてきました。
おかげ横丁では、日本の伝統文化に込められた願いを大切にし、さまざまな催しで端午の節句をお祝いします。ご家族そろってお楽しみください。
日　時／4月25日(土) ～ 5月6日(水) 10：00 ～ 17：00 (催しによって異なる)
場　所／おかげ横丁一帯

- 鎧武者に大変身(予約優先)
  本格的な兜や鎧を身に着け、武士姿で記念撮影ができます。 お手持ちのカメラで撮影していただけます。 男の子はもちろん女の子も参加できます。
  日　時／4月25日(土) ～ 5月6日(水) 10：00 ～ 17：00
  場　所／伊勢路 名産 味の館 2階「大黒ホール」
  参加費／1,500円(税込)～

- 端午の節句タペストリー作り体験
  伊勢型紙彫師の那須恵子氏がデザイン・制作した伊勢型紙で、オリジナルのタペストリーを作りましょう。生成りの生地に布用絵具を使い型染めします。
  日　時／通年開催 10：00 ～ 17：00
  場　所／伊勢路栽苑
  参加費／1,870円(税込)

- 軒菖蒲(のきしょうぶ)
  家に邪気や災厄が入り込むのを防ぐために、強い香りで邪気を払う菖蒲や蓬などを束にして5月4日の夜に玄関の軒につるす風習があります。
  おかげ横丁の各店の軒先に飾ります。
  日　時／5月4日(月・祝)夕方 ～ 5月5日(火・祝)
  場　所／おかげ横丁一帯

お問い合わせ/おかげ横丁総合案内「おみやげや」 電話0596-23-8838

五十鈴塾

源頼朝の伊勢信仰と鎌倉

養和元年(1181)、旗揚げ直後の源頼朝のもとに祈祷のため参着した度会光倫という権禰宜が、一般に伊勢御師のはじまりとされており、頼朝が伊勢神宮を崇拝していたことは確かなようです。しかし、その頼朝によってつくられた鎌倉の中心はあくまでも八幡信仰でした。
本講座では、5月に予定されている五十鈴塾鎌倉ツアーのコラボ企画として、「武士の都」というイメージの強い鎌倉の宗教都市としての側面についてお話します。
日　時／4月20日(月)　13：30 ～ 15：00
講　師／岡野 友彦（皇學館大学文学部長）
参加費／一般 1,500円　会員 1,000円
場　所／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

五十鈴茶屋

五十鈴茶屋節気菓子

山吹(やまぶき)
山吹が鮮やかな黄色の花をつける季節です。
日本原産で、万葉集にも詠まれるほど古くから親しまれています。
美しく咲く姿を、白餡を包んだ薯蕷饅頭に仕立てました。

神馬(しんめ)
神宮の神馬といえば、もとは皇室ゆかりの御料馬。
毎月、1日、11日、21日の三度、参道を通り正宮前でお参りします。
御紋入りの衣をまとい、厳かに進む神馬の出立ちを真っ白な道明寺とこし餡で表しました。

水藻(みずも)
五十鈴川の岸辺から川面へ向け目をこらすと、日差しに照らされてきらきらと水藻が揺らめく様子が見えます。
その光景を葛寒天と羊羹を使い、透き通るように表現しました。